

【寄稿】

提案論文：探究活動導入に当たっての高校の現状と課題†

— 高大連携を踏まえて —

林仁大*

三重県立津東高等学校*

キーワード：探究活動，キャリア教育，総合的な探究の時間，地域課題

1. はじめに

今回のシンポジウムで、『探究活動導入に当たっての高校の現状と課題 ～高大連携を踏まえて～』という題で、普通科で始まる探究活動についての現状を、筆者の所属する津東高校の現状を交えながら、紹介する機会をいただいた。本校はまだまだ取組みが始まったばかりのため、様々な視点からアドバイスをいただけるようたたき台としての話題提供の役割だと考えている。また、筆者個人は、前任校もいわゆる進学校だったのだが、そこも含めて十数年、普通科におけるキャリア教育を実践してきている。津東高校の探究活動自体が始まったばかりにもかかわらず、当シンポジウムで筆者が話題提供することになった理由は、これまでの実践も踏まえてかと思う。併せて高等学校の普通科の取組みから探究活動に関しての考えを述べ、高大連携として情報交換のきっかけとなれば幸いである。

以下の3点について話題提供としたい。

- ①なぜ高校（普通科）で今「探究活動」か
- ②例として本校の取組み
- ③高校（普通科）の課題や今後の展望

2. なぜ高校（普通科）で今「探究活動」か

筆者は、普通科のキャリア教育に関わり、特に、進学校（当シンポジウムは、高大連携の一環として行われ

ているものでもあるため、あえて進学校という言葉も使う）で様々な取組みを実践している中でベースとして考えているのは、「学力向上」（基礎学力・知識活用力など）と「人間力育成」（キャリア教育的視点・基礎的汎用的能力・社会人基礎力など）である。生徒が、高校3年間でこの二つの力を向上させ、大人への土台を身に付けて、また社会人として必要な力が何かを認知したうえで卒業し、次のステージで、社会人として「世のため人のため」に社会貢献し活躍する人材へ育ててほしいと考えて教育活動をしている。筆者はこのような考えをベースにして、在籍校にて進学校としてのキャリア教育やアクティブ・ラーニングの実践に携わってきた。

最近、高校現場では、将来を見据えて大きな変革が求められている。その大きな2つの理由を示す。

一つは、大学入試改革で、大学入学共通テストが導入され、センター試験が廃止になるということである。これは、2019年度に高校2年生である生徒からで、大学関係者も我々も大いに関係することだ。共通テストについては2017年度から二度プレテスト（試行調査）があり、今、我々に届く進学系の情報誌からは、その分析結果の記事を複数見る。ある情報誌の分析では、出題の特徴が3つに集約されている。うち2つは、「社会との関わりや探究活動を意識した問題設定」と「情報を統合・考察する

高校(進学校)が改革する理由

- 1: 現高1生: 大学入学共通テスト に変更 (入試改革)
- 2: 現小6生: 新学習指導要領 に改訂 (高校は来年度より移行期間)

1: 大学入学共通テストで求められる力 ベネッセ教育研究所 (2019)

・ 試行調査 (プレテスト) の出題の特徴 (出題分析として)

- 「社会との関わり」や「探究活動」を意識した問題設定
- 複数の資料を読み取り、情報を統合・考察する力の重視
- 解答形式の多様化 (記述式問題・新形式マーク問題)

・ 読解力 (複数の、多様で、大量な情報の中から必要なものを見抜く)

2つの読解力

- 主に思考力・判断力・表現力を働かせることで発揮される読解力
→教科毎に育成
- 主に知識と技能を活用することで発揮される読解力→教科横断で育成

2: 高等学校 新学習指導要領 のKEYWORD

3つの柱

「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」

「学びに向かう力、人間性等」

授業改善

「主体的・対話的で深い学び」

探究活動

「総合的な探究の時間」

組織的教育

「カリキュラム マネジメント」「社会に開かれた教育課程」

新設科目

「論理国語」「古典探究」「理数探究」

「世界史探究/日本史探究/地理探究」「公共」

「論理・表現I・II・III」などの科目

他キーワード

「家庭や地域との連携、協働」「教科横断的な視点」

「言語活動、体験活動、ICTの活用」「主権者教育」

高等学校学習指導要領解説より

図1 入試改革で大学入学共通テストへ

図2 新学習指導要領に改訂

力の重視」という視点が指摘されているが、これは当シンポジウムの意図と関連するところと考える。

また、記事には「読解力」が重要とある。確かにプレテストの自分の教科を解いても、文章量が増えデータ・資料も多く、読解力の育成が今後のポイントになる。さらに読解力には、教科ごとに育成される読解力と教科横断で育成される読解力があるとのことで、何をどうやって育成するのかという課題に我々は直面していると考え。この共通テストを筆頭に大学入試改革が今後なされていくことを我々は念頭に置く必要がある。

変革を求められている2つ目の理由は、学習指導要領の改訂である。これは、2019年度に中学1年生の学年から実施される。右にキーワードを羅列したが、「主体的・対話的で深い学び」、「総合的な探究の時間」、「カリキュラムマネジメント」など今回の改訂の軸となる言葉のほか、新設科目にも探究や表現という言葉が並ぶ。

文部科学省が示した新学習指導要領改訂の視点には、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」そして「どのように学ぶか」が重点的に指示されている。「どのように学ぶか」と、学び方まで示されており、アクティブ・ラーニングがそれに相当する。

新学習指導要領うち、注目されるのが「総合的な探究の時間」であり、まさにPBL的な活動といえる。これまでの「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」への改訂ということは探究活動に特化することと理解できる。各校ともキーワードとして挙げた、キャリア形成、自らの問いを見だし探究する、横断的・総合的な学習、課題を発見し解決、最適解や納得解などを、意識的に育成する時間を設け取り組む必要がある。

筆者は地理歴史科を担当するが、現状、授業を行っている、生徒はややもすると「学習」自体を暗記中心の学習のことと位置付けており、探究活動についても調べ学習で答えを見つけることが深い学びと勘違いしているこ

とも多い。探究活動の場を用意しただけでは課題解決へ向けて段階的にうまく深められないことは、それまでの生徒の学習環境によるところが大きい。最適解や納得解を自分から見いだすということは、これまで経験がなく自信を持っていないことも実際大きな要因といえる。よってこれらに対する取組みが「総合的な探究の時間」やその他の探究活動になる。

また、当シンポジウムは「PBL(問題発見解決型学習)」と「総合的な探究の時間」の接続を展望する」ということだが、これまで総合的な学習の時間でされていたものが、まさに探究活動に特化して、新たに総合的な探究の時間を行うことが先行実施として各校求められている。文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業や専門高校の課題研究を実施している高校も多いが、そういう意味では普通科高校はこれからのスタートである。総合的な探究の時間ということだけでなく、やや大きい枠でジェネリックスキルの育成としてのキャリア教育のありかたも踏まえ考えていきたい。

3. 例として本校の取組み

筆者が津東高校に異動したときに当時の管理職から、津東高校はこれまで普通科高校ということもあってキャリア教育的な取組みがほとんどなかった訳だが、高校現場の時代の流れのなか、少しずつ本校として取組みを構築していく必要があるだろうという話があった。その具体化の一つとして、総合的な学習の時間のなかで探究活動の機会を加えようということになり、3年半ほど前に数人のワーキンググループをつくり、これまでであった小論文の学習の取組みをリメイクした形で企画したのが、「表現力育成プログラムI」である。本校1年時後半に実施している取組みで2018年度で3年目になる。

これは、三重県の地域課題発見・解決学習である。一つ目に、三重県にはどのような課題があるのか、二つ目に、生徒が課題の背景や取組みを理解解が一つでないことを知り、自分自身がそれに対してどう関わって社会

新学習指導要領改訂の視点

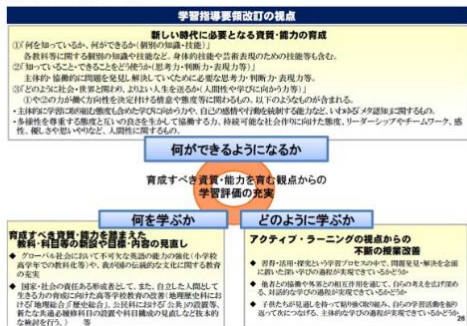


図3 新学習指導要領改訂の視点 (文部科学省 2015)

「総合的な探究の時間」

高等学校学習指導要領解説より

- 「総合的な学習の時間」→「総合的な探究の時間」
- 自己の**キャリア形成**の方向性と関連付けながら「**見方・考え方**」を組み合わせ統合させ、働かせながら、**自ら問いを見だし探究**することのできる力を育成する。
- 「**探究の見方・考え方**」を働かせ、**横断的・総合的な学習**を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく**課題を発見し解決していく**ための資質・能力を育成することを旨とする。
- **最適解や納得解**を見いだすことを重視している。
- 「**①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現**」

図4 新教科「総合的な探究の時間」の主旨

貢献をしていくのか、三つ目は、話し合いや発表を経て、多様な視点から考察力や表現力、協働する力を身に付けることを目指して取組みを企画した。

津東高校 「総合的な学習の時間」の取組み

『表現力育成プログラムⅠ』

1. 今、三重県においてどのような状況にあるか、また**県内特有の課題**としてどのようなものがあるか、理解する。
2. **課題の背景や現在の取組み**を知り、解決・改善に向け、**解が一つでないこと**を理解する。さらに、**自分自身がどう関わり、どう社会貢献**していくか、自らの生き方や学びにつなげて考える。
3. 課題解決に向けた話し合いや自分の考えを発表することで、**多様な視点**から考察する力や、表現力、**協働する力**を身に付ける。

→ 県庁各部署の方の講義（10テーマ）→ 地域課題を考察・対策提案→発表
 ○振り返り・ポートフォリオ・ルーブリックも実施(年により工夫)
 ○実施3年目 ○2年次は「表現力育成プログラムⅡ」

図5 表現力育成プログラムⅠのねらい

また、プログラムの軸として、三重の課題を知るために、県庁に最も近い普通科高校の地の利を生かして、10テーマについて県庁各部署の方々の講義を用意し聴く機会を設けた。生徒は、その中で、例えば、三重県の観光先進県を目指す施策や食品ロス削減の対策など、具体的な施策などを学んだ。

表1 県庁各部署による講義テーマ

地域課題テーマ一覧（10テーマ）		
NO	テーマ	サブテーマ
1	医療	高齢社会に必要な医療
2	少子化	少子化問題を考える
3	介護・福祉	幼児と高齢者の課題
4	観光	観光先進県をめざして
5	防災	巨大災害と三重の防災対策
6	農林水産業	自然との共生
7	都市計画	安心・安全な街づくり
8	企業・雇用	三重で働くということ
9	地域活性化	地域を活性化するには
10	環境	ゴミ問題から見る環境問題

このようにして、10回の授業を使って、地域課題を知り、グループで対策を話し合い、外化として作成案をポスターセッションの形で発表させた。我々もその中で、発表のルーブリックや、ワンペーパーポートフォリオなど、学年で若干の違いもあるものの3年の間で少しずつ工夫し実施した。さらに、高大連携ということで、三重

大学教育学部の総合的な学習の時間についての講義を受講している学生に2回参加願い生徒にアドバイスをいただいた。

なお、2年時の表現力育成プログラムⅡでは、1年時のグループ学習やポスターセッションでの表現と異なり、具体的な社会貢献案をつくるため、個人での取組みを中心に、自分の将来や進路に関連づけて考えさせた。テーマは「私が、『三重(〇〇市)のために地域貢献する作戦』を立てる」とし、生徒各々が自分でやるべき、またできる地域貢献をかたちづくり、それを具体的に文章化し、サマリーを文集として仲間に伝える取組みを行った。

新学習指導要領の先行実施が、来年度から始まる。三重県も教育委員会の指導で各校とも総合的な探究の時間を先行実施することになる。SSH等の事業を絡めて実施している高校や課題研究などで本当に素晴らしい発表や成果物のある取組みをしている高校も多いが、本校のようにこれから企画運営して探究活動を実施し始める高校も少なくない。本校は上述した取組みを発展させてこの教科をかたちづくっていくことになるが、良い実践を始めた学校も出てきているようだ。

4. 高校（普通科）の課題や今後の展望

このような探究活動を現場で実践してきて、生徒の取組みの課題について考える。以下にいくつかにまとめた。生徒がこれらの視点を常時持ち取り組むことになると成果も良いものになると考える。

- ・いわゆる「調べ学習」ではなく「探究活動」(=自らの考察や提案)にする。
自分の考えとして質疑応答などにも対応できるところまで様々な視点から考察する力を身につける。
- ・何が要求されているかのイメージを理解した上で、自分の考えを整理する。
字面で「わかる」と、それを踏まえ実働して得た「できる」の違いを感じて学びを深め、前向きに俯瞰的に物事を考える力をつける。

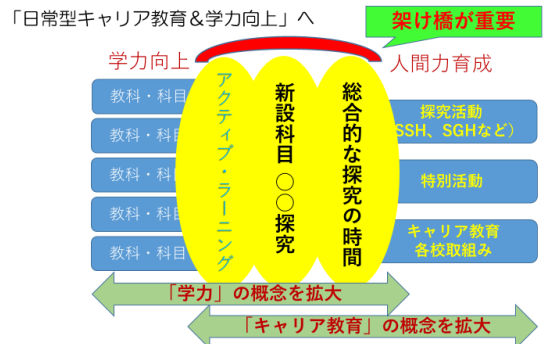


図6 日常型キャリア教育と学力向上のつながり

- ・知識を自分の考えにつなげて、発信、つまり外化にいたるまでかたちづくる。
論理的思考力、読解力、知識活用力、文章力、プレゼン力の向上を意識させる。
- ・すぐに「解」を求めず自分なりの解を構築する。
解のない問いに対し自分なりの解を持つとする意識を醸成する。
- ・仲間とともにつくり上げる経験（自信）をする。
グループで意見をまとめてひとつのものを創造したり、学び合いを行うことで相乗効果を得る。自他の意見を尊重してより良いものをつくる。

筆者は、これまでキャリア教育の取組みの企画・運営に携わってきた。前任校では文部科学省事業のSSHや普通科のキャリア教育のあり方を研究したりした。その中で実感し目指したものは、生徒が、「本物の社会と接し、本気の大人と出会うことで授業では得られない刺激を受ける」ことである。さらにその効果として「学びへのモチベーション」へつなげることを願い、探究活動やジョブシャドウイング、高大連携などに取り組んできた。生徒は明らかに変化するし意欲も高まり充実感を感じることもある反面、課題もあった。

しばらく前まで、人材育成のベースとして「学力向上」と「人間力育成」を掲げてキャリア教育の実践をしてきたが、その取組みを放課後や長期休業中のイベント型で実践しているだけでは、普通の教科・科目の学習との間になかなか相乗効果を得られず、イベントが単発で終わるものも多かった。活動の中で、生徒は授業で学習したことを、もっと探究活動などの取組みで活用すべきだと感じたし、校外で学んだことをもっと教科学習へのモチベーションに生かすべきだと思う場面に遭遇した。つまり、生徒の中でその関連の体感が薄いということで、両者の間に大きな壁の存在を実感したものである。では、その関連性を高めるには、教員側が両者をつなげる架け

高校教員の課題

- ・探究活動に対する教員側のスキルアップ
 - 1：「探究活動とは…」をもっと勉強する
－もしかすると二つの「PBL」の明確化などまでも
 - 2：「学力」の概念を新たにして伸長させる
－「知識偏重」からの脱却
－「知識活用力」の重視
 - 3：進路指導を新たにする ←探究活動も含めて見る
－大学合格がゴールではない！ジェネリックスキルも意識
－高大連携としてアドミッションポリシーをどう理解するか
 - 4：「自分の教科・科目だけすればよい」時代からの脱却
－平成の終焉： 昭和＝団塊Jr.まで 大量生産時代
平成＝ゆとり世代→ゆーとーり世代

図7 探究活動を進める上での教師側の課題

橋をつくる取組みを考えてサポートする必要があるのではと考えた。そうであるならば、普段、学校現場で多くの時間を割いている「授業」でその架け橋も意識した学習をする必要がある。そのような時期に、アクティブ・ラーニングという言葉が教育現場に現れたことを思い出す。さらに授業だけでなく、部活動や特別活動などもあわせて、学校で行われている行事すべてをキャリア教育としてつなげることが重要だと考えるに至った。こうして、日常型キャリア教育の概念がつくられ、ここを大切にしたいと考えている。今回の新学習指導要領にある、「総合的な探究の時間」や新設の「〇〇探究」などの科目、またアクティブ・ラーニングという手法のアプローチが注目されているのは、まさにこの両者の架け橋づくりだと著者は考えている。

このように考えていくと、我々教員の課題として、学力向上と人間力育成の相乗効果を上げるためには、「学力」というものの概念を拡大する必要を実感する。つまり、これまでの教科・科目を教えるという概念をキャリア教育のほうへ拡大させた学力を構築する必要がある。またキャリア教育の考え方もイベント型から日常型へ変わっていくように、探究活動をはじめとしてまだまだ改善が求められる。学校としてジェネリックスキルも学力の一部した学力向上を軸足にししながら、学校生活全体がキャリア教育として人間力育成をすすめる。これが究極に進むと将来的には、そもそも学力向上と人間力育成とを分けていることや「教科を教える」という概念が古いということになるのかもしれない。

見える力、見えにくい学力、見えない学力という学力の氷山モデルを学んだことがある。見える学力というのは点数、偏差値などの学力という意味だが、特に見えにくい学力などをどう付けていくのかを意識することも今後さらに求められるのだろう。

やや概念的な方向へ進んだが、教員の課題の具体を考える。

探究活動の充実

- ・どんな力を育成するための取組みなのか、目的の明確化
－例えば「文章力重視」か「内容重視」かなど
- ・地域力の活用 ～高校が社会との「ハブ」に～
－まずは「なぜ地域貢献を考えさせる」のか
- ・総合的な「知識活用力」「論理的思考力」の充実
「協働」・「討論」の充実
- ・「見える学力」「見えにくい学力」「見えない学力」を意識
- ・知識の少ないところでどう議論させるか、運営の技術
- ・持続可能な取組み
- ・その他 諸々

→高校普通科の探究活動のあり方

図8 探究活動の充実を計るには

三重大学の地域人材教育開発機構からの学生向け PBL ガイドをみると、PBL の利点が示されておりその意義は大きいわけだが、高校生、また高校現場としてはその基礎として何が求められているのだろうか。

探究活動をより良いものにするための教員側のスキルアップが重要になる。これまで自分の教科科目に限定される指導や知識偏重の指導だったものを変える意識を持つ必要がある。それが自分の教科科目であれ、「総合的な探究の時間」などの指導であれ、どんな人材を育成するのかという部分で大切になる。特に普通科は大学の入試改革や新学習指導要領の改訂をきっかけに共有することが重要である。

5. おわりに

このように、いま高校現場は、様々な視点から変革が求められている。今回は述べていないが、ICT の導入などもその一つであるし、地域課題を知り社会貢献する力やグローバル社会で強く生きる力を身に付ける教育も大切だ。そんな中、総合的な探究の時間の年間計画や指導案を考えていく必要がある。今回はこのタイミングで、このシンポジウムの発表機会を得た。これを機に三重の人材育成を共にする方々と高大連携を促進させたい。また我々は「学力観」や「教育観」についてもいろいろな視点から学び共有する必要がある。主体的・対話的で深い学びが本校でも探究活動を通して実践され生徒の力に結びつくようにしたい。そして様々な情報を生徒に還流し、「生徒ファースト」で学習活動を続けていきたいと考えている。

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2019). VIEW21 高校版
2018 年度 Vol. 6.
文部科学省(2015).『教育課程企画特別部会における論
点整理について (報告)』 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm) (2019 年 3 月 18 日).
文部科学省 (2018).『高等学校学習指導要領解説』.

† Jindai Hayashi* : Proposal : Current status and future prospects of implementing inquiry-based study in high school: based on collaboration between high school and higher education

* Tshigashi High School 1470 Isshindenkouzubeta Tsushi, Mie, 514-0061 Japan.